

『絵解きと縁起のフォークロア』

小池 淳一

その特性の抽出に成功している。縁起をテキストとして読むだけでなく、それらが声となり、上演される姿に着目し考究する方法が提示されているといえよう。

第Ⅱ部「近代に生きる絵解きのフォークロア」では、第一章で信州善光寺と紀州高野山周辺における刈萱の絵解きの姿が提示され、ついで、高野山刈萱堂をはじめとする多様な刈萱の絵解きが論じられる（第二章）。信州の刈萱山西光寺の絵解きについての現代における展開が第三章で述べられ、最後に第四章では太宰治が幼少期に親しんだ青森県金木の雲祥寺の地獄絵と太宰文学の受容の問題が論じられている。

ここでは、近代における絵解きの生成や変化を広い視野から追究し、その原動力や要因となる事象を捉えようとしている。絵解きが成立し、維持され、変容していく背景や条件までも取り上げ、さらに絵画とその社会的な位相を考察する姿勢が提示されているといえよう。

第Ⅲ部「縁起のフォークロア」では、日光山縁起絵巻の成立過程の考察（第一章）、

本書は絵解き及び略縁起研究の領域で多年にわたる粘り強い活動を続けてきた久野俊彦氏（以下、著者とする）の論考一四編とそれらと緊密に結びつく資料四編とが一書に仕立てられたものである。タイトルに明らかのように、それらが民俗研究の立場で統括されていることが、口承文芸研究にとっても重要である。ここでは、内容を紹介するとともに、本書の口承文芸研究への貢献を伝説および「場」の観点から考えてみたい。なお、本書評ではこれからの読者の参考にするために、論及する当該頁をなるべく具体的に示し、評者の読みを相対化できるように努めた。

一 内容紹介

本書は序章と全Ⅲ部一三章からなる。序

章は「絵解きと縁起への視角―語り・文字・絵画」として全体を貫く問題意識が開陳され、続いて第Ⅰ部「近世の絵解きと縁起」では、まず、親鸞聖人絵伝の絵解きをめぐる写本が持つ意義について論じられ（第一章）、次いで寺社の開帳空間における縁起をメディア論からとらえる（第二章）。その視点はさらに宝物の展観とそれに付随する語りの考察（第三章）に発展していく。そうした空間や装置のなかでの縁起の近世的な特徴を整理し、明示しているのが第四章であり、第五章では『愛敬稲荷略縁起』を例に、略縁起の成立と変化について論じている。

ここでは、近世社会における縁起の様相を絵解き（エトキ）を含む開帳という「場」を通して考察するという姿勢が提示され、

日光山縁起と民間伝承との関わりの検討（第二章）が行われた後、第三章では縁起と儀礼との関係を素麺地蔵説話を例として検討し、第四章では縁起と信仰との連関を庚申信仰を素材に論じている。

ここでは、縁起をテキストとして孤立させて検討するのではなく、絵画や伝説、儀礼、信仰といった関連する文化事象と並行させ、その機能や意味、さらには変遷の過程が析出されている。縁起が決して閉じられ、固定したものではなく、自在に成長し、新たな意味を生み出していくものであることを明示し、そうした縁起を軸とした文化研究の可能性を示唆しているといえよう。

本書は全体として、時代的には中世から現代に至る長い時間を扱い、そのなかの縁起の展開について多角的な視座から跡づけた意欲的な著作といえることができる。単一の主題や対象によって貫かれたものではないものの、かえってそれゆえに著者の方法的意識、複眼的なアプローチの手法が浮き彫りにされているのである。

二 方法的特色と叙述の特徴

― 本書の達成点と問題点

次に評者が本書から読み取った方法的な特色、達成点について述べてみたい。

著者自身があとがきで述べているように（三七六頁）、本書は文献と民俗という視角で貫かれている。これは文字記録が膨大に存在する日本文化史研究においては当然ともいえる視角であるが、具体的な実践にあたっては、文学及び歴史学と民俗学という成り立ちも問題意識も異なる学際的な手法を要するものであり、その達成は決して容易なものではない、ということを確認しておきたい。文献記録を読むこととフィールドワークを行うことを共に意味ある作業にするためには、机上と野外という全く異なる条件のもと、それぞれの資料や事象の性質に即した解析が必要なのである。本書は、そうした資料の根幹的な性質の違いを踏まえつつ、それら相互の架橋を縁起の成長や変容という視点で可能にした成果ということができる。

それを支えているのは、資料に対する著者の柔軟な姿勢である。多様なテキストの検討や、伝承とその記録類にとどまらず、多種多様な資料を用いて検討を進めている。それは例えば、刈萱の絵解きに関しては近世から近代にかけての地誌や名所案内や近代の絵入り本の活用（二二六―一三七頁）や、雲祥寺の地獄絵に関しては参詣者による『参詣記念帳』への記入内容に対する注目（一六五―一六八頁）等によく表れている。絵解き研究は絵画という視覚に訴えるメディアを主として文学研究の対象として大きく開いた研究領域であるが、著者はそれにとどまらず、さらに絵画と関連する社会的文化的な諸事象、諸記録との関係の中で考察を行っている。こうした絵解きを特殊視せず、巨視的な縁起の展開との関わりを重視する方法の提示こそが、本書の大きな達成点といえることができる。

そして、そうした達成の基盤にあるのは資料を読み込み、分析した上で、表に整理して相互に比較を可能にするという堅実な姿勢である。本書の二二―二二三頁の

「絵解き」「刈萱」対照表」、一七〇―一七二頁の「雲祥寺『参詣記念帳』記述有無一覧」、一九八―一九九頁の「日光・赤城山

龍神戦伝承一覧表」、二二一―二二二頁の「庚申縁起」対照表」、三二二―三四五頁の「御伝私考」構成一覧表」等にはそうした資料分析の視点と手順とがよく表れている。これらは本書が多様な資料の実証的な解析の上に成り立っていることを示している。そればかりではなく、著者のこうした分析結果を入念に検討することで新たな研究上のテーマや考察の芽を見いだすことも可能であろう。本書はそうした客観性を担保した叙述に貫かれているのである。

こうした後に続く研究のための環境整備という面では充実した索引や本書の三分の一を占める大量の関連資料の翻刻・紹介も重要である。索引は書物の読み方を別次元に解き放つものであるし、資料の翻刻・紹介は貴重な素材を研究者全体に共有のものとする意義を持つ。索引は形式的な付録では全くないし、資料の翻刻・紹介は時として論文以上の価値と生命とを持つ。著者は

本書をまとめるにあたってそうした面への顧慮を忘れていない。著者の従来の研究との関わりでは、二二頁にあるような、親鸞の異伝は正典である「御伝鈔」を絶対視する立場からは全て「偽造」の書であるという指摘はいささか性急な表現ではあるが興味深い。著者は既に時枝務とともに『偽文書学入門』（二〇〇四年、柏書房）という挑発的なタイトル言うまでもなく、日本古文書学の古典であり、優れた入門書として定評のある佐藤進一の『古文書学入門』を意識している―の研究書を編集している。権威によって「正」とされたものを相対化し、「正」からそぎ落とされたり、異端視される「偽」の世界の豊饒さや重要性を忘れない姿勢は著者の研究に通底しているもののように思われる。

本書の問題点としては、序章において、基本的な研究の視角が提示されているものの、それを具体的に展開した本書全体の内容を受けての結論にあたる部分がないことが物足りない。各章における課題提示と分析とは手堅いものの、本書全体を通じて著

者が主張したいことは何なのかが見えにくく、読み取りづらいことは残念ながら指摘しておくかねばならないだろう。それと関連して、研究史の把握や評価について著者は意外に冷淡であるという印象を受ける。タイトルに示されている「絵解き」と「縁起」についてもそれらの語が含意する研究上の意義については序章で述べられているものの、そうした視角が生み出されてきた経緯についてはそれぞれの研究書が注で羅列される（一五―一六頁）だけで、個々の研究の評価や相互の位置づけは避けられている。こうした研究史的整理に淡泊な姿勢であるが、後学の者にとっては不親切であることは否めないであろう。

個々の論考においても、結論にあたる部分で内容や分析の結果を繰り返すことはほとんどなく、唐突に論が閉じられる感が強い。著者は各章で得られた成果をもって次の考究へと進んでいくことに急であり、その考察を振り返り、再度、吟味検討する興味が薄いかに見える。各章の結論にあ

たる重要な叙述は往々にして最終節ではなく、そのひとつ前の節にある場合が少なくない。もちろんこのことは考察それ自体の価値や意義を損なうものではないのだが、いささか読みづらい印象を抱くのは評者だけではないだろう。

三 口承文芸研究への貢献

最後に本書の口承文芸研究における意義、本書から導かれる口承文芸研究の新たな課題について評者なりの読みを示して参考に供したい。

その第一は伝説研究に関する点である。伝説がモノ（事物）に付随するものであり、信仰を伴うものであることは口承文芸研究において常識に属するが、その生成過程についての論究は、口承文芸および説話文学の領域内にとどまる場合が多い。本書に収録された論考のなかで、開帳における「エトキ」という行為は、寺社が所有する宝物や縁起に関わるモノを、開帳の場において物語、由来とともに人々の眼前に具体的に提示するものであった（五六頁）。もちろん、

それは絵画の中の世界ともつながっており、絵解きに登場したモノが同じ開帳の場に並べられている場合もあった（七六頁等）。

これらは八九頁で著者が主張するように、寺社の伝説となり、伝承されていく場合が少なかつたであろう。こうした状況は近世社会における伝説をめぐる状況としてとらえることもできるが、それでは、現代における伝説の定義を無批判に遡らせるだけであり、いささか乱暴であろう。それよりも本書の第一部の諸論考で示されているように、後に伝説としても伝えられていく物語や説話、あるいは歴史認識が、開帳という「場」で再確認、編集され、モノと結びつけられていったと解するべきである。そしてそうした「場」におけるエトキは、神仏に対する信仰を強化する機能を持つていた。伝説の性格の重要な要素である事物との結びつきや信仰的な要素との関わりがここでも見出すことができるのである。そのように考えた時、本書は口承文芸研究における伝説の分厚い研究の蓄積との接続が可能になり、それらとの比較検討に

より新たな伝説研究の地平が開けると期待されるのである。

このことは第二として、口承文芸の「場」への新たな省察も可能にするだろう。縁起の展開については、その内容は文学的な追究を必須とするものであるが、本書で取り上げられた開帳という「場」をくぐり抜け、絵巻や掛幅画あるいはモノという視覚的な情報を加えることで話の長短、内容の難易などがさまざまに変動したであろう。エトキを含む開帳という「場」はそうした話の上演空間である。このことは口承文芸研究が、説話の伝承に際して、語り手のしぐさや表情、その民俗的属性に注意してきたこと、あるいは囲炉裏や生業における作業空間に着目してきたこととの比較を強く示唆する。開帳という「場」を唱導という意図のもとに周到に編み上げられた特殊なものであるとして、口承文芸の「場」と異質なものとして遠ざけることは決して得策ではない。現代の口承文芸が、観光という文脈でも生命を保ち、また絵本や映像という媒体による表現の中にも存在することは周知

のことである。ただし、そうした状況を、それぞれの時代規制とそれに固有の資料の存在形態に即して分析、考察することについて方法レベルでの議論はそれほど盛んではないように思われる。本書を時代の異なる対照軸として参照することで、口承文芸の「場」に関する議論が深化することが期待されるのである。

以上、本書は口承文芸そのものの研究書ではないものの、口承文芸研究に志すものにとっては当然、ふまえるべき多くの豊かな内容と論点を持つ重要な著作である。こうした書物の刊行を心から喜ぶとともに著者のますますの活躍をお祈りしたい。またここで評者が舌足らずに述べてきた問題だけにとどまることなく、縦横に本書を読み解くことで、口承文芸研究を新たな段階に押し上げていく読者、研究者が現れることを期待している。

(二〇〇九年一〇月、森話社刊、本体
七二〇〇円)

(こいけじゅんいち／国立歴史民俗博物館)

書評

勝俣隆著

『異郷訪問譚・来訪譚の研究』

斎藤 英喜

『異郷訪問譚・来訪譚の研究』というタイトルをもつ本書を開いて、最初に目にはいるのは、煌びやかなカラーの天体写真である。天の河を挟んで向き合う織女星と牽牛星、オリオン座・おうし座、そしてそこに書き込まれた異様なサルタヒコの図像、さらにキトラ古墳の天文図……。はたしてこの本のテーマは何なのかと訝しく思うのだが、あらためて気づかされる。そう、本書は、『星座で読み解く日本神話』（大修館書店）の著者である勝俣隆氏によるものであったのだ。

ただし、本書では「星座」から神話を読み解くという議論がメインではなく、主要なテーマは〈異郷訪問譚・来訪譚〉の分析である。著者によれば、異郷訪問譚は「現世の地上世界、神話であれば葦原中国か

ら、それ以外の異郷を訪れる話」（1頁）、異郷来訪譚は「現実世界とは異なる異郷から、ある神や異類などが現世を訪れる話」（2頁）と定義される。以下、第一部「地下世界訪問譚」、第二部「海の果ての異郷への訪問と来訪」、第三部「海中の異郷訪問譚」、第四部「天上世界への訪問譚と来訪譚」と部立てして、イザナキ・イザナミの黄泉国神話、スサノヲの天上世界訪問、浦島伝説、ホラリの綿津見宮訪問、国土創成神話、天孫降臨神話、七夕伝説など、『記』『紀』『風土記』のお馴染みの神話世界が解説されていくのである。

しかし本書を読み進めていて、やはり一番面白いところは、神話・伝承と「星座」の関係の関係を説いていくところだろう。そこに本書の眼目があるのは間違いない。とく